

しらかべ

2020年12月24日 人権・同和教育部発行



猛暑の夏まただ中に始まったたいへん長い2学期でしたが、ようやく学期末を迎えることができました。夏休みにピークとなっていた新型コロナ感染は、秋以降再び拡大して、現在第3波と呼ばれるような深刻な状態になっています。しかしこのことをめぐって、いまだに差別やハラスメントが起きているというニュースが聞かれます。誤った知識を元にした思い込みや発言が差別や偏見となり、向けられた人々を苦しませるということは、ハンセン病の人権課題や同和問題をはじめさまざまな人権課題において共通して言えることです。新型コロナウイルスについては、新しい感染症でもあり、そしてさまざまな報道や意見、発言がなされてきたことから、いったい何が正しい知識なのか正直言って分からないと思われるかもしれません。しかしこれまでも人権通信で書いてきましたが、差別とは「排除」です。「コロナは怖い」と言って自分がとろうとする行動や言葉の中に、人を「排除」し遠ざけようとする意識が潜んでいると、相手がどんな気持ちになるか、傷つくかを顧みないような言葉や行動になってしまい、コロナハラスメントや差別にあたります。またそれによって私たちの社会も分断されてしまいます。一つひとつの情報が信頼できるのか否かということを考える力が求められていると同時に、私たちが情報に踊らされない人権感覚を持っているかどうかも試されていると言えるでしょう。

今号では、2学期に実施した人権関連行事と人権・同和教育ホームルーム（LHR）の様子を紹介いたします。
 ＊＊＊

★ 2年生 人権講演会 大湾 昇さん「出会いと表現 ～あることをないことにしない～」★

2年生を対象に行う人権・同和教育では、11月4日に徳島県の大湾昇さんをお迎えして人権講演会を実施しました。大湾さんの本校での講演は3回目で、今年も生徒の心を引き寄せる講演をしてくださいました。大湾さんの講演の中で必ず紹介されるのが、レイナさんという女性のお話です。レイナさんは中学生の時にいじめを受けていたそうですが、その頃に大湾さんの講演を聞いた後、大湾さんにその時の気持ちを話す機会がありました。その時、自分がいじめられていた時の様子や今の自分の気持ちを講演で話してほしいと言ったそうです。それ以来、大湾さんは講演の中でレイナさんのことを必ず話されているそうです。大湾さんがこれまで経験されてきたことや、たくさんの人たちとかがわってきて得たことがふんだんに盛り込まれたお話は、生徒の心に強く響いたようです。



★ 1・2年生 人権映画鑑賞会 「こどもしょくどう」★

これまで12月に人権映画鑑賞会を行っていた坂出市民ホールが耐震工事のため休館になったことで、昨年度は本校で講演会を行いました。今年はあらためて映画をとということで「こどもしょくどう」（2018年・日本）を鑑賞しました。この映画は地域のコミュニティにもなっているある町の食堂を舞台に、さまざまな家庭の事情を持つ子どもたちの交流を描いています。映画の中ではいじめやネグレクト（育児放棄）、子どもの貧困など、子どもをめぐるさまざまな社会問題にスポットがあてられ、作中に登場する子どもや大人の人間関係や心情、その変化の様子をみることができます。下記に生徒の感想を掲載いたします。また、あらすじや予告編の動画が映画のオフィシャルサイト（右にリンクするQRコードを掲載しました）で観ることができますので、あわせてご覧いただけたらと思います。



《生徒の感想より ～映画の中で最も印象に残ったシーンや台詞はどこですか？～》 ▼私はユウト君の「見て見ぬフリ」という言葉が印象に残りました。初めは姉妹2人のことを見ているだけだったユウト君が、途中から2人のことを思って行動していく姿はすごいと感じました。でも学校や野球でいじめられているタカシ君のことをかばう姿はなかったです。その点からお母さんに向かって言った言葉は、自分にも向けているように感じました。▼最後に姉妹が施設に行くために車に乗るシーンです。女の子が振り返ったときの表情がとても良かったと思いました。女の子の、少年たちや少年の家族に対する感謝や、親に捨てられた悲しさ、これからの人生に対する不安など、たくさんの感情が入り混じっている表情だったのではないかと思います。また

車の中で「お母さん」と叫ぶシーンも印象に残りました。捨てられたことは理解していて、とても悲しいはずなのに、でも会いたいと思うのはその少女たちにも幸せな家族の時間が過去にあって、その時間が戻ってくるかもしれないと少しでも思っているからだろうと思いました。

★ 1年生LHR 「ハンセン病回復者の人権課題」★

今学期は「ハンセン病回復者の人権課題」をテーマに取り組みました。例年は1学期にハンセン病の概要や歴史を学び、夏休みにホームルーム運営委員（HR委員）が大島青松園への現地研修に訪れています。そして実際に見聞きして学習したことや、肌で感じた空気感を2学期のLHRでクラスに伝えていました。今年は現地への訪問がかなわず、運営委員は前年の訪問の映像資料で事前学習を行い、LHRを行いました。昨今の状況においてハンセン病と新型コロナウイルス感染症を重ね合わせて考えざるを得ません。ハンセン病をとりまく差別を学ぶ中で、現在の私たちが考えるべきことややるべきこと、そしてやってはいけないことをしっかり考える機会となりました。



《生徒の感想より》 ◆どんな病気であっても生きる価値はみんな一緒だと思いました。◆何も悪くない人々を受けとめられる社会をつくりたい、など簡単に言えることではなく、まずその感染症に一人ひとりが向き合うことが大切だと思います。◆私達自身が（新型コロナに対する）差別的な行動や言動を止めなければ、過去に差別を受けて苦しんだ人達の思いや願いを踏みにじっているような気がした。◆私たち一人ひとりが正しく理解し、過去を知り、未来へつなげていけたら「人権侵害」という言葉はいずれなくなると思います。

★ 2年生LHR 「部落の歴史」～部落の起源から水平社の設立～」★

1学期に行った部落差別の始まりや江戸時代の身分差別についての学習を踏まえ、近代の部落差別について、NHKのTV番組「その時歴史は動いた」で放送された「人間は尊敬すべきものだ」を教材に学習しました。多くの生徒が、部落差別問題についてあまり知らなかったこともあり、その歴史の事実を知り、真剣に受け止め、差別問題について考えるきっかけとなりました。特に、西光万吉が、差別解消のために立ち上がり、水平社宣言を行う場面では、人間の尊厳を求め西光の力強い姿に、多くの生徒が心を動かされた様子でした。また、生徒は自らの日常を振り返り、人とどう向き合うべきかについて西光万吉の生き方から考えを深めていました。この学習をふまえ、11月4日に大湾昇さんの講演を聴きました。

《生徒の感想より》 西光万吉さんが、自分達の誇りを忘れずに持つよう訴えていたのがとても印象に残った。▲差別は無意識の中から生まれるということに気づいたので、自分が良いと思ってしてきたことでも振り返って、相手に無礼ではないか、見下していないかを意識して考えていくようにしたいと思った。▲自分が人と接するときは、尊敬の気持ちで、個性を認め、その人の本質を見るようにしようと思った。▲人を見るときは、人の悪いところばかりではなく、良いところをたくさん見つけたい。▲部落差別があるということやそのことによって苦しんできた人がたくさんいるということこれから伝えていかなければならないが、差別意識をもう一度引き起こすことがないように正しい知識をもって正面から向き合うことが大切だと思った。

★ 3年生LHR 「幸せな生き方を求めて ～結婚差別解消のために～」★

3年生では、結婚差別をどのように解消していくかについて学習しました。夏休みにHR委員が結婚差別聞き取り学習会に参加し、差別解消に取り組む運動に携わっている方から部落差別や結婚差別の現状についてお聞きしました。そしてHR委員が学習会に参加して学んだことや感じたことをLHRの中で発表し、成果をクラスで共有しました。また被差別部落出身の若い姉妹が結婚や仕事を行う中で考えたことを語る講演のビデオもあわせて視聴し、部落差別の問題とどのように向き合うべきか、考えました。

《生徒の感想より》▼今まで実際に被差別部落出身の人の話を聞いたことがなかったので、その当事者が持つ率直な思いを知ることができたことは一つのよい経験になった。紙の上での文字や数では、差別の実態やその時の悲しみ、憤りまでを正確に学べていなかったのだと思う。▼知って学んで理解するまでは誰でもできることです。学んだことをそのまま客観的に考えるのか、さらに深くその人たちの立場で主観的に考えるのか、それをやるかやらないかが今後差別が残るか残らないかの分かれ目だと思います。

（お願い）お読みいただいて感じたことや人権について考えることなどについて、別紙にお書きいただけたらと思います。新学期に入りましたら、お子様を通して学級担任までご提出ください。よろしくお願ひします。